

彭瑞麟写真展イリン



わたし
我は誰か / 僱係麼人 / 我是啥人 / 我是誰
2025.11.17 Mon.—2026.1.30 Fri.

写大ギャラリー 50周年記念展 IV

主催：東京工芸大学芸術学部

協力：彭瑞麟資料庫、台北駐日経済文化代表処
台湾文化センター

写大ギャラリー | SHADAI GALLERY

10時—19時 | 入場無料 | 休館日：木曜日・日曜日

2025年12月28日[日]—2026年1月4日[日]

1月12日[月・祝] | 1月16日[金] | 1月17日[土]

※ただし11月30日[日]は開館



TECHNOLOGY × ART
KOGEI
東京工芸大学 TOKYO POLYTECHNIC UNIVERSITY

写大ギャラリー50周年記念展Ⅳ
2025年11月17日[月]—2026年1月30日[金]



写大ギャラリー | SHADAI GALLERY

10:00—19:00 | 入場無料

休館日：木曜日・日曜日 | 2025年12月28日[日]—2026年1月4日[日]

1月12日[月・祝] | 1月16日[金] | 1月17日[土]

※ただし11月30日[日]は開館

主催：東京工芸大学芸術学部

協力：彭瑞麟資料庫、台北駐日経済文化代表処、台湾文化センター



太平洋戦争中のアポロ写真館(台北)

彭瑞麟 (ボン・ルイリン Peng Ruey-lin 1904—1984)

日本統治時代の台湾・新竹県に生まれる。1923年に台北師範学校を卒業し、1928年に東京寫真専門学校(現・東京工芸大学)に入学。台湾人として初めて写真学士の学位を授与される。卒業後、台北に写真館「アポロ写真館」を開く。営業写真のかたわら日本のピクトリアリズムの影響を強く受けた作品などを制作。また館内に「アポロ写真研究所」を設立し、写真教育にも力を入れた。日中戦争中は徴用され広東省に通訳として従軍。戦後は写真から離れ、58歳で漢方医となる。近年、国立台湾博物館、国立台湾美術館、國家摄影文化センターなどで展示が行われ、台湾で再評価されている。

イベント情報

●トークイベント

「写真家・彭瑞麟を語る——孫から見た祖父の肖像」

日時：11月28日[金] 18:30—20:30

登壇者：彭雅倫(敬称略) ※聞き役 写大ギャラリー 小林紀晴

参加費無料・要予約

●日台合同シンポジウム

「日台写真史の交錯と継承——彭瑞麟の視座から」

日時：2025年11月30日[日] 12:30—18:30

登壇者：彭雅倫・王雅倫・侯鵬輝・飯沢耕太郎・吉田成(敬称略・順不同)

参加費無料・要予約

※登壇者・内容は諸事情により変更になる可能性があります。

※タイトルの「我(わたし)は誰か／僱係麼人／我是啥人／我是誰」は

左から日本語、客家語、台湾語、國語(北京語)の順で、同一の意味をもつ

彭瑞麟写真展

わたし
我は誰か 僱係麼人
我是啥人 我是誰

彭瑞麟(1904—1984)は日本統治時代の台湾で、客家人(17世紀頃から広東省などから移住)として生まれました。1928年、本学(旧・東京寫真専門学校／現・東京工芸大学)に入学、1931年に卒業(6期生)した、日本で写真を学んだ台湾の第一世代にあたります。

今回、ご遺族のご協力のもと、すべての作品を台湾からお借りすることができました。彭瑞麟の日本初個展となります。また本ギャラリーにおいて、卒業生としてもっとも初期に撮影された作品(1929)展示ともなります。台湾写真史、さらに日本写真史を語る上でも重要な作品群です。

彭瑞麟は本学在学中から、当時学長であった結城林蔵をはじめ、東京写真研究会で名を馳せた小野隆太郎などの教授陣から最先端の写真技術と表現を学びました。学友を撮影した肖像写真には「ゴム印画法」によるものが多くみられます。

注目すべきは「三色カーボン印画法」によって制作されたカラー作品です。高度な知識と技術を要し、工程は複雑で、作品を完成させるために2ヶ月ほどかかったといわれています。この技法による作品は現在日本ではほとんど確認されておらず、大変貴重なものです。また、ピクトリアリズムなど当時の日本写真の潮流、その影響が色濃く感じられます。

彭瑞麟の人生は、時代に翻弄され続けました。日本統治時代に生まれた彼は日本国籍を有し、日中戦争に二度にわたり徴用され、広東省へ通訳として従軍しました。台北の繁華街に「アポロ写真館」を設立しますが、太平洋戦争末期、空襲を恐れた当局から立ち退きを求められます。さらに戦後、国民党に冤罪で逮捕され、釈放される際に多くの財産を失いました。

それらの出来事を要因のひとつとして、彭瑞麟は写真から離れます。台湾では二・二八事件、白色テロをきっかけに国民党による戒厳令が1987年まで38年間続きますが、そのこととも深く関係しています。「幻の写真家」あるいは「沈黙の写真家」とも呼ばれ、長く家族の記憶のなかにだけ留まり続けていました。

彭瑞麟は生涯にわたり、みずからのアイデンティティについて考えざるをえなかったのではないのでしょうか。日本語が厳しく制限され、40歳を過ぎてから國語(北京語)を学び始めた彼は、四つの言語のはざまで、何を想い、何を望んだのでしょうか。どの言語によって思考したのでしょうか。

写真から離れたあとも、彭瑞麟は晩年までセルフポートレイトを撮ることだけはやめませんでした。何故でしょうか。みずからに向けた「我は誰か」という無言の問いかけに思えてなりません。

企画構成 小林紀晴

写大ギャラリー

SHADAI GALLERY

〒164-8678

東京都中野区本町2-4-7

東京工芸大学5号館2F

Tel: 03-5371-2694

東京メトロ丸ノ内線

都営地下鉄大江戸線

中野坂上駅1番出口徒歩7分

www.shadai.t-kougei.ac.jp



instagram



X

東京工芸大学・中野キャンパス

TOKYO POLYTECHNIC UNIVERSITY

東京都中野区本町2-9-5

2-9-5 Honcho, Nakano-Ku, Tokyo

164-8678 Japan

Tel 03-3372-1321(代)

芸術学部：

写真学科／映像学科／デザイン学科／

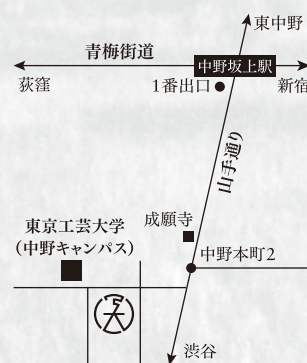
インタラクティブメディア学科／

アニメーション学科／マンガ学科／

ゲーム学科

大学院：

芸術学研究科(博士前期課程・後期課程)



TECHNOLOGY × ART
KOGEI
東京工芸大学 TOKYO POLYTECHNIC UNIVERSITY